

科目名	フィールドスタディD	教員名	藤江昌嗣
実習先	岐阜県不破郡垂井町、滋賀県蒲生郡日野町中在寺、京都市		
実習期間	2022年12月6日(火)から12月8日(木)		
テーマ	「地域企業・産業調査」		

目的（実習のねらい）：

本実習（「地域企業・産業調査」）では、地方産業都市を訪問し、地域中核企業や行政（産業振興担当）でのヒアリング調査などを行う。我が国では、経済のグローバル化が進み、国内の企業はその工場を中国・タイ・インドネシア・マレーシア・ベトナム・カンボジア・ラオス・ミャンマーなどアジア各地に移転させ、所謂「産業の空洞化」が進んでいる。こうした動きは、アジア主導の域内相互依存型の発展構造の形成でもある。こうした環境下、技術、新製品、販売方法・マーケティング等において工夫を凝らし、その成果を出している国内企業にヒアリングを行う。

実習を通じた「到達目標」は、経営者の哲学、経営戦略、人材育成、地域産業政策等について学ぶと共に、企業現場の最前線の呼吸を体験してもらい、「ものづくりの心」を感じ、それを具体化する力の形成である。

実習報告：

12月6日(火) 東京出発、14時から16時 HOWA 訪問

(1) HOWA 株式会社 岐阜 岐阜県不破郡垂井町



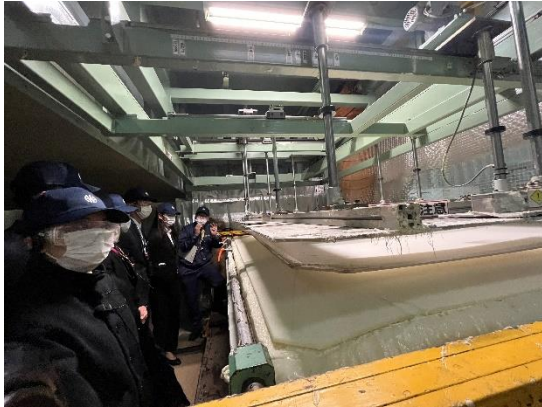
株式会社 HOWA（ホーワ）は代表取締役社長は高田智行氏(写真左)である。また、副社長は代表取締役副社長平山 諭氏(写真右)である。本社所在地は、愛知県春日井市味白山町で設立は1955年3月である。

その事業内容は、自動車用内装部品の企画・開発・製造・販売である。また、資本金は3億240万円、売上高は654億円（2021年度グループ全体）で、従業員数は3,221名（2022年3月末グループ全体）なので一人当たり売上高は2030万円と高くなっている。

また、主要製品は、ヘッドライナー、ダッシュインシュレーター、サンシェードトリム、ドアトリム、ラゲージトリム、NV製品等であり、自動車の内装品を中心に生産しており、納品先は、アイシン精機株式会社、いすゞ自動車株式会社、株式会社FTS、スズキ株式会社、ダイハツ工業株式会社、トヨタ自動車株式会社、トヨタ自動車東日本株式会社、トヨタ車体株式会社、豊田通商株式会社、トヨタ紡織株式会社、南条装備工業株式会社、日産自動車株式会社、日産車体株式会社、林テレンプ株式会社、日野自動車株式会社、ベバストジャパン株式会社、本田技研工業株式会社、三菱自動車工業株式会社等である。

1955年に自動車用コットンマット（クッション材）の生産開始後、1966年にフロア用パット材（フェルトアップ）生産開始、1967年にはダッシュインシュレーターの生産開始、1978年にシート用RCMマットの生産開始、1992年にウレタンダッシュインシュレーターの生産開始、1996年にはウレタン成形天井と天然繊維成形天井の生産開始、また、1999年にはモジュール成形天井の生産開始、2000年には日豊化成（株）岐阜工場が竣工、同年高圧・低圧インジェクション成形トリムの生産開始と製品ジャンルをほぼ確立した。2003年の（株）豊和繊維岩手製作所設立（岩手県胆沢郡）で国内の生産体制をほぼ確立した。また、2002年には、本社「システム開発センター」を設立した。この間、2004年のHowa USA, Inc 設立（米国インディアナ州）、翌2005年の天津新明繊維樹脂製品有限公司設立（中国）などにより、米国、中国等にも事業を展開してきている。

当日は、高田社長、平山副社長も工場に来て頂き、工場見学前に同社の沿革や現状、課題等について高田社長から説明を受けた。その後、工場長はじめ工場スタッフの方々とともに、直接工場・設備の説明をして下さり、見学後も質疑応答の時間をつくって下さった。



集合写真

<沿革>

- 1955年
 - ・会社設立（愛知県名古屋市中区御幸本町）
 - ・名古屋市黒川工場にて自動車用コットンマット（クッション材）生産開始
- 1960年
 - ・春日井工場新設（愛知県春日井市味美白山町）
- 1961年
 - ・本社移転（愛知県春日井市味美白山町）
- 1965年
 - ・磐田工場新設（静岡県磐田市）、フロア用パット材（フェルトトップ）生産開始
- 1967年
 - ・ダッシュインシュレーター生産開始
- 1970年
 - ・厚木工場新設（神奈川県厚木市）、成形天井生産開始
- 1978年
 - ・岡崎工場新設（愛知県岡崎市）
 - ・シート用RCMマット生産開始
- 1987年
 - ・東豊産業（韓国）設立
- 1991年
 - ・本社「技術本館」竣工 半無音響室設置
- 1992年
 - ・(株) 豊和繊維九州製作所設立（福岡県嘉麻市）、ウレタンダッシュインシュレーター生産開始
- 1995年
 - ・本社「技術センター」竣工
- 1996年
 - ・ウレタン成形天井生産開始、天然繊維成形天井生産開始
- 1998年
 - ・岡崎工場にオレフィンシートライン設置
- 1999年
 - ・モジュール成形天井生産開始
- 2000年
 - ・日豊化成（株）岐阜工場竣工、高圧・低圧インジェクション成形トリムの生産開始
- 2002年
 - ・本社「システム開発センター」設立
- 2003年
 - ・(株) 豊和繊維岩手製作所設立（岩手県胆沢郡）
- 2004年
 - ・Howa USA, Inc 設立（米国インディアナ州）
 - ・厚木システム開発センター開設（神奈川県厚木市）
- 2005年
 - ・天津新明繊維樹脂製品有限公司設立（中国）
- 2006年
 - ・佛山新明繊維樹脂製品有限公司設立（中国）
 - ・本社「実験棟」竣工
- 2007年
 - ・American Howa Kentucky, Inc 設立（米国ケンタッキー州）
- 2008年
 - ・(株) 豊和繊維栃木製作所設立（栃木県那須塩原市）
 - ・Howa USA Holdings, Inc 設立（米国ミシガン州）
 - ・広東豊明商貿有限公司設立（中国）
- 2009年
 - ・武漢新明繊維樹脂製品有限公司設立（中国）
- 2010年
 - ・Howa (Thailand) Co., Ltd. 設立（タイ）
 - ・Howa USA, Inc を American Howa Kentucky, Inc に統合
- 2011年
 - ・豊和繊維研発（佛山）有限公司設立（中国）
- 2012年
 - ・PT. Howa Indonesia 設立（インドネシア）
 - ・フォルシア豊和インテリア設立（神奈川県厚木市）
 - ・Howa Tramico SAS 設立（フランス パリ）
- 2013年
 - ・本社「コミュニケーションセンター」竣工
 - ・MEXICO S.A. DE C.V. 設立（メキシコ）
 - ・Howa Canada Manufacturing, Inc. 設立（カナダ）
- 2014年
 - ・襄陽新明繊維樹脂製品有限公司設立（中国）
- 2019年
 - ・4月1日付商号変更（弊社および国内関連会社）

旧社名	新社名
豊和繊維工業株式会社	株式会社 HOWA
株式会社豊和岩手製作所	株式会社 HOWA 岩手
株式会社豊和栃木製作所	株式会社 HOWA 栃木
株式会社豊和九州製作所	株式会社 HOWA 九州
日豊化成株式会社	株式会社 HOWA 岐阜
- 2020年
 - ・東京支社新設
- 2021年
 - ・東京支社に厚木システム開発センターを統合

経営方針は

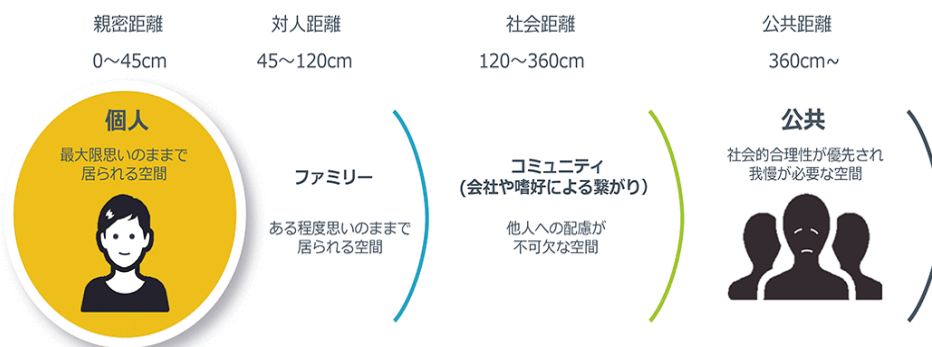
「45cmの快適空間 パーソナルスペースから考える」

HOWA

45cmの快適空間

HOWAってどんな会社なんだろう？私たちは“45cmの快適空間”を創造する会社です。
パーソナルスペース（※1）から考える、個人の心地よさを実現する空間45cmを思いのままにしたい。
そんな自動車ユーザーのニーズをHOWAが実現します！

45cmって、どんな距離？



※1 パーソナルスペース
1996年 アメリカの文化人類学者のエドワード・T・ホールがパーソナルスペースを4つのゾーン（上図）に大別した

というもので、同社の製品を利用するユーザーの視点を重視する姿勢が良く表現されている。

御礼状

先日は、大変お世話になり、ありがとうございました。

自動車に関連する企業ということで、運転が趣味な私にとって楽しい訪問先でした。実際に部品が製造されている工程を自分の目でしっかりと見られたことはこれまでもなく、これからも経験できないことだと感じました。

国内だけではなく、グローバルにも活躍されているところをみると日本の自動車産業の発展を改めて実感することができました。

社員の方でも普段見られないような現場までも見学させていただき、大変貴重な経験となりました。

今回は訪問させていただき、本当にありがとうございました。

M. (参加学生)

先日は大変お忙しいにもかかわらず、お時間を割いていただき、誠にありがとうございました。

先日の訪問を通して、貴社の社員の働きやすさを追い求めた環境作りに感動いたしました。会社の中には、利益を求めて自社の定めるKPIの達成ばかりを重視し、働く社員にまで配慮できていないところもあります。しかし、貴社は働く従業員に感謝し、従業員がいるからこそ会社が成り立つことを最重要視しているように感じました。社員一人一人の不満に耳を傾け、それらの改善に努める姿勢は他の会社のお手本となると思います。本当にありがとうございました。

I. (参加学生)

(2) 株式会社ダイフク 日に新た館



滋賀県蒲生郡日野町中在寺 (同社HPより)



本社 大阪市西淀川区御幣島3-2-11 (同社HPより)



東京本社 東京都港区海岸1-2-3 汐留芝離宮ビルディング (同社HPより)



人事総務部 細川 誠様



同 逸見里帆様 (明治 OG)



細川様説明

株式会社ダイフク (Daifuku Co., Ltd.) は 1937 年 5 月設立、資本金 318 億 6,530 万円 (2022 年 3 月 31 日現在)、代表取締役社長 下代 博氏、従業員数 12,436 人 (グループ計 / 2022 年 3 月 31 日現在)、連結売上高 5,122 億 6,800 万円 (2022 年 3 月期)、東京証券取引所プライム市場 (証券コード: 6383) である。

事業内容は、物流システムに関するコンサルティングとエンジニアリングおよび設計・製造・据付・サービスなどで、搬送システム、保管システム、仕分け・ピッキングシステム、制御システム、物流機器、その他事業 (電子機器、洗車機) で、我が国を代表するマテリアルハンドリング企業である。今回訪問した日に新館は 1994 年の開館以来、世界約 90 の国と地域から延べ約 50 万人が来館している『世界最先端のマテリアルハンドリング・ロジスティクス体験型総合展示場』であり、同社にとって、お客さまの課題解決に向けたソリューション提案をおこなうための施設でもある。

今回は、同社人事総務部の細川 誠様、逸見里帆様に同社の説明をして頂いた。その後、日に新館の方に同館の見学に際し、説明を行って頂いた。最後に質疑応答を行った。

<沿革>

同社は、1937 年 (昭和 12 年) に株式会社坂口機械製作所として発足。資本金 30 万円、従業員 150 人。大阪市西淀川区大和田町に工場を建設、製鉄用の鍛圧機械 (写真) を中心に製造した。

1939 年 (昭和 14 年) 御幣島工場 (写真、現 大阪本社) を新設。翌 1940 年に本社を大和田から御幣島に移転した。

1944 年 (昭和 19 年) 株式会社坂口機械製作所から兼松機工株式会社に社名を変更。

- 1946年(昭和21年) 第2次世界大戦直後会社存続のために雑穀粉碎機、氷かき機、映画館の椅子を製造。
- 1947年(昭和22年) 兼松機工株式会社から大福機工株式会社に社名を変更。
当時大阪と福知山に工場があったことから、大福と名づけた。
また、生産機種を「スタッカー」などに変更し、荷役運搬機械の製造を開始した。
- 1948年(昭和23年) 「パイラー」、「スラットベヤ」の製造を開始。
- 1952年(昭和27年) スイスのBuhler Brothersと技術提携。「バルクベヤ」の製造を開始した。
- 1953年(昭和28年) 四日市倉庫に日本初の「バルクベヤ」を納入。
- 1957年(昭和32年) ウェブ・コンベヤシステム1号機をトヨタ車体・刈谷工場に納入した。
- 1963年(昭和38年) 小牧工場竣工、操業を開始。米国のBowl-Mor Company, Inc.との提携で、ボウリングマシンの国産第1号機(写真)を生産。
- 1964年(昭和39年) 「日新(ひにあらた)」を社是に制定。
- 1965年(昭和40年) 日本初の無人搬送車「プロントウ」(写真)を製造・販売。
メッシュボックスパレット「パレテーナ」の製造・販売を開始。
- 1966年(昭和41年) 日本初の高層自動倉庫「ラックビルシステム」を小牧工場内に完成、公開。
松下電器産業・電機事業部に1号機を納入。
- 1968年(昭和43年) 初の会社スローガンとして「無人への挑戦」を標榜。
- 1969年(昭和44年) 東京・大阪・名古屋証券取引所第1市場に上場。旭化成工業・延岡ベンベルグ工場に
日本初のコンピューターオンライン制御による自動倉庫「ラックビルシステム」(写真)を納入
- 1970年(昭和45年) 滋賀県日野町に約120万m²の工場用地を取得。インダストリアルパークを構想し、
翌1971年に造成工事に着手。大阪で開催された日本万国博覧会に「プロントウ」、「パレテーナ」で施設参加。
- 1977年(昭和52年) 洗車機事業に進出、生産を開始。
- 1978年(昭和53年) 中央大学図書館に日本初の書籍自動搬送システム「テレリフトシステム」を納入。
レナウン・商品センターに、アパレル業界最大級となる全長約2,200mの、
「ハンガーレールシステム」1号機を納入。
小西六写真工業・八王子に複写機生産システムを納入。
- 1980年(昭和55年) 日産自動車・相模原パーツセンターに格納数10万バケツ超の「バケツ
ビルシステム」を納入。チェンコンベヤが東大寺大仏殿の昭和の大修理に貢献。
- 1983年(昭和58年) 米国・シカゴに初の現地法人Daifuku U.S.A. Inc.を設立。
- 1984年(昭和59年) 半導体製造向けの「クリーンスタッカー」、「クリーンウェイ」(写真)、
「クリーンシャトル」を開発。大福機工株式会社から株式会社ダイフクに社名を変更。
- 1985年(昭和60年) カナダ・トロントに現地法人Daifuku Canada Inc.を設立。
- 1986年(昭和61年) シンガポールに現地法人Daifuku Mechatronics (Singapore) Pte. Ltd.を設立。

デジタル表示器を利用した「デジタルピックシステム」(写真)を開発。
- 1992年(平成4年) クロスベルト式の小物自動仕分け機「スキーソーター」(写真)、
移動棚を活用した自動倉庫「マジックアイルシステム」を開発。
- 1993年(平成5年) 世界初の非接触給電によるモノレール搬送システム「ラムランHID」(写真)を開発。
関東自動車工業・岩手工場に納入。連続洗車機「マジックスルー」を発売。
- 1994年(平成6年) 無人搬送車「マジックビークル」を開発。
世界最大規模のマテリアルハンドリング・ロジスティクスの総合展示場「日に新た館」を開設。
- 2017年(平成29年) 米国統括会社Daifuku North America Holding Companyの本社を移転。
滋賀事業所が緑化優良工場等経済産業大臣賞を受賞。
公募増資等により、資本金を150億1,610万円から318億6,530万円に増資。
- 2018年(平成30年) Knapp AGの全株式を売却。
ファーストリテイリング社と中長期的・包括的な物流に関する戦略的グローバルパー
トナーシップを構築。地球温暖化防止活動環境大臣表彰を受賞。
- 2019年(平成31年/令和元年) インドのVega Conveyors and Automation Private Limited(現・Daifuku
Intralogistics India Private Limited)の全株式を取得し、子会社化。
保安検査設備等の空港向けシステムなどを手掛ける、
オランダのScarabee Aviation Group B.V.の株式80%を取得し、子会社化。

空港向け情報管理システムを手掛ける、オーストラリアの Intersystems (Asia Pacific) Pty. Ltd.の、全株式を取得し、子会社化。

ベトナムに現地法人 Daifuku Intralogistics Vietnam Co., Ltd.を設立。大阪本社の新事務棟が完成。

2020年（令和2年）米国 Wynright Corporation が工場新設、2工場を集約。生産能力約2倍に増強
米国に現地法人 Daifuku Cleanroom Automation America Corporation を設立。

セルフ手荷物チェックインシステムを日本航空へ納入。羽田空港国内線第1旅客ターミナルのシステム。

2021年（令和3年）ドイツの AFT Industries AG と業務提携契約を締結。

「ダイフク環境ビジョン 2050」を策定。楽天とパートナーシップ協定を締結。

ダイフクグループの経営理念を「モノを動かし、心を動かす。」に改定。



集合写真

御礼状

先日は大変お忙しい中にもかかわらず、お時間を割いていただき誠にありがとうございました。

業務内容について具体的なお話をさせていただき、また、実際に貴社の雰囲気に触れることができ、その中でも特に貴社の製品開発におけるこれからの仕事においての人と機械のバランスについてのお話や、顧客の持ち物や商品が傷つかないように仕分け工程の際に紙のシートを敷く動きをプログラミングするという貴社のユーザーへの配慮から沢山のことを学ぶことができたので私にとって非常に有意義なものとなりました。

改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

I. (参加学生)

この度は、ご多忙中にもかかわらず私たちの企業訪問を受け入れてくださり、誠にありがとうございました。

会社での説明に加え、事業所内の紹介、日に新館を丁寧に案内していただき多角的に貴社の提供する価値を学ぶことができたと感じています。日に新館では、実際にマテリアルハンドリングの商品が動く姿を目の当たりにし、感動しました。現代の私たちが享受する便利な生活を支える裏には貴社のような企業が生み出した価値がたくさんあるのだなと感じました。多くの機械がありそのそれぞれが、細部まで考え抜かれた動きをすることで多くの課題を解決し、効率化を実現する姿に魅了されました。

私は「人々が抱える不満や課題を解決し、豊かな社会を作ることに貢献したい」という思いを持っており、今回の訪問では、そのための視点が散りばめられており、終始学びの連続でした。自動化における機械を提供するのと同時に、デジタル化などの付加価値を提供することでより、顧客のニーズに対応し、利便性と効率性を高める視点はとても興味深く感じました。「このようなものがあつたらいいな」という理想を形にしてしまおう、アイデアと技術力やその視点は、勉強になることばかりでした。また機会がありましたら、訪問させていただきたいと思っています。

T. (参加学生)

(3) 日新イオン機器株式会社滋賀事業所 甲賀市水口町ひのきが丘



執行役員兼管理企画部長上山辰司様

日新イオン機器株式会社 Nissin Ion Equipment Co., Ltd.は、1999年4月1日設立、資本金15億円、代表取締役社長 長井宣夫、本社所在地は京都府京都市南区西九条東比永城町75 (GRAND KYOTO 4F)。事業内容は、半導体製造装置、フラットパネルディスプレイ製造装置の開発、設計、製造、販売、保守である。また、従業員数は285名(2022年7月1日現在)、日新電機株式会社の100%出資会社である。売上高は200~300億(過去5年:第26期~30期)である。

日新イオン機器株式会社代表取締役社長 長井 宣夫氏のトップメッセージは以下のものである(一部のみ)

「ユニークなイオンビーム・プラズマ技術でデバイスの未来に挑む

日新イオン機器株式会社は、半導体製造用のイオン注入装置事業を開始した1973年以来、半導体デバイスや液晶あるいは有機EL等のフラットパネル・ディスプレイ(FPD)の主たる製造装置メーカーとして、国内外問わず世界の生産プロセスの基盤を支え続けてきました。

更なる素晴らしい社会の実現に向けて、半導体やFPDのアプリケーションは絶えず拡張し、その進化のスピードが加速している今日、顧客やマーケットが当社に求めるものも縦横に一層の広がりを見せています。

当社はかねてより、一点で圧倒的に飛び抜けた顧客価値を提供するために、イオンビーム、プラズマやそれらの輸送技術などで尖った独特なテクノロジーを磨き、装置開発に繋げると共に、高い生産性、信頼性、及び安定性を持つデバイス量産システムとして製品を作り上げてきました。また、製品納入後もアフターサービスの提供を通じて、お客様と深く長年にわたる関係を築くことにより、顧客の発展を陰日向で支え続けています。」

同社訪問に際し、イオン機器株式会社 執行役員兼管理企画部長上山辰司様、総務人事部長 浜口公平様、総務人事部総務グループ長 古賀雄二様、同 総務グループ、井上舞香様そして同社元執行役員 庄司正明様に御世話になりました。

同社滋賀事業所の到着後、上山様、浜口様、井上様から同社の沿革や主要製品の説明並びに事前の質問等にも説明を受けた後、同事業所を見学させて頂きました。



見学の服装



井上舞香様(左)、 浜口公平総務人事部長(右)



集合写真

同社の沿革

- 1973年 日新電機株式会社、HVEE (High Voltage Engineering Europe)社と技術提携
- 1974年 イオン注入装置生産開始
- 1978年 200kV 中電流イオン注入装置開発
- 1980年 ウェスタンエレクトリック (現 AT&T) 30kV 大電流イオン注入装置の技術導入
- 1981年 200kV 中電流イオン注入装置 (ベルト搬送エンドステーション) ” NH-20C” 開発
- 1982年 200kV 大電流イオン注入装置 ” PR-200” 開発
- 1983年 イオン機器事業部設置
- 1984年 中電流イオン注入装置 ” NH-20S” のフルオート、デュアルエンドステーション ” NH-20SD” 発売
- 1985年 80kV 大電流イオン注入装置 ” PR-80” 発売
- 1986年 久世工場新設・移転、回転注入エンドステーション開発
- 1987年 新型中電流イオン注入装置 ” NH-20SR” 発売
- 1988年 新型大電流イオン注入装置 ” PR-80A”、新型デュアルエンドステーション ” NH-20SDR” 発売、フラットパネルディスプレイ用イオン注入装置事業を開始
- 1989年 8インチパラレルビーム中電流イオン注入装置 ” NH-20SP” 開発、量産用 400kV 中電流イオン注入装置 ” NH-40SR” 納入
- 1990年 低温ポリシリコン TFT(LTPS-TFT)ディスプレイ用イオン注入装置(イオンドーピング)の1号機を納入
- 1991年 8インチ大電流イオン注入装置 ” EXCEED8000” 開発
- 1993年 回転注入機構付き中電流イオン注入装置で ” 市村産業賞” 受賞
- 1994年 新型中電流イオン注入装置 ” EXCEED2000” 開発、量産用 500kV 中電流イオン注入装置 ” NH-50SR” 開発
- 1996年 LTPS-TFT ディスプレイ用イオン注入装置(イオンドーピング)納入本格化
- 1997年 英国 (スコットランド) に日新電機欧州会社設立
- 1998年 改良型 8インチパラレル中電流イオン注入装置 ” EXCEED2000A” 発売開始
LTPS-TFT ディスプレイ用イオン注入装置(イオンドーピング) ” ID5600” ” ID6700” を納入開始
- 1999年 300mmウェハ用イオン注入装置 ” EXCEED2300” 顧客評価開始
日新電機株式会社より製造移管を受け ” 日新イオン機器株式会社” 設立
- 2000年 量産用 300mmウェハ用イオン注入装置 ” EXCEED2300” 納入開始
- 2001年 台湾に合弁会社 ” 日亞聯合離子機器股份有限公司” 設立、中国 (上海) に駐在員事務所開設

- 2002年 韓国に子会社”韓国日新イオン株式会社”設立、中国（上海）に子会社”日亞意旺机械（上海）有限公司”設立、シンガポールに日新イオン機器株式会社”シンガポール支店”開設
- 2003年 資本金を4.9億円から15億円に増資
- 2004年 新型300mmウェハ用イオン注入装置”EXCEED3000AH”発売開始、第4.5世代基板サイズ(730mm×920mm)のLTPS-TFTディスプレイ用イオン注入装置”iG4”を納入開始
- 2005年 滋賀県甲賀市に滋賀事業所・プラズマ技術開発センターを開設
日新電機株式会社より製造移管事業に関する営業権譲渡を受ける
- 2007年 注入エネルギー領域を最大960KeV迄拡大した300mmウェハ用イオン注入装置”EXCEED9600A”発売開始
- 2008年 世界初のクラスターイオンビームを用いたハイブリット型イオン注入装置”CLARIS”発売開始
- 2010年 米国（テキサス州）に100%子会社として”NISSIN ION EQUIPMENT USA, Inc.”設立
パワー半導体用高温注入装置”IMPHEAT”を納入開始
- 2011年 中国江蘇省揚州市に100%出資の生産子会社として”日新意旺高科技(揚州)有限公司”を設立
世界初の第5.5世代基板サイズ（1300mm×1500mm）対応のLTPS-TFTディスプレイ用イオン注入装置”iG5”を開発・納入、世界初の第6世代基板サイズ（1500mm×1800mm）対応のLTPS-TFTディスプレイ用イオン注入装置”iG6”を開発・納入
滋賀事業所に工場第二エリアを増築、米国子会社”NISSIN ION EQUIPMENT USA, Inc.”に研究開発組織を新設、拠点をマサチューセッツ州ボストン近郊に設置
- 2015年 半導体用イオン注入装置”BeyEX(-H)”を納入開始
半導体用イオン注入装置”EXCEED3000AH-8C”を納入開始
- 2016年 滋賀事業所に工場第三期エリアを増築
- 2017年 VCSEL用水素注入装置”EXCEED400HY”を納入開始
- 2019年 パワー半導体用新型高温注入装置”IMPHEAT-II”開発
- 2020年 滋賀事業所に事務棟を増築、本社機能を東寺オフィスに移転

御礼状

株式会社日新イオン機器様

先日はお忙しい中、私たちのためにお時間を作っていただき、誠にありがとうございました。

日新イオン機器様のオフィス・工場の両方を見学させていただき、実際に社員の皆さまが働いている姿を拝見し、相手に満足していただけるよう、また、日新イオン機器様が誇る製品に対してベストを尽くそうとされていることがより強く伝わってきました。

また、企業訪問前に研究したことについて実際にお話を伺いできたことでより理解を深めることができ、疑問点に関しましても、こと細かく丁寧にお答えいただけたこと、大変感謝しております。

日新イオン機器様が誇るイオンビーム技術は私自身存じていませんでしたがお話を伺う中で非常に興味を持たせていただき、これから社会に出ていくうえで非常に勉強になりました。

今回、学んだことを踏まえ、今後の就職活動・学業に役立てて参りたいと考えております。

改めまして、会社訪問のお時間を頂戴し、誠にありがとうございました。

未筆ながら、貴社のさらなるご繁栄とご発展を心より祈願いたします。

O. (参加学生)

先日は大変お忙しい中にもかかわらず、私達藤江ゼミナールのためにお時間を割いていただき誠にありがとうございました。

業務内容について具体的なお話をさせていただき、また、実際に貴社の雰囲気に触れることができ、その中でも特に異分野の技術を取り入れたイノベーションマインドから、貴社の従業員のパフォーマンスを高めるための工夫や、従業員が働きやすい環境づくりの面からも沢山のことを学ぶことができた良い機会になりましたので私にとって非常に有意義なものとなりました。

末尾ながら、長井様はじめ皆様方に改めて御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

I. (参加学生)

(4) (株)川島織物セルコン 京都市左京区静海市原町

企業理念

川島織物セルコングループは、世界のお客様に感動と満足を与える商品・サービスを提供することにより、常に新しい文化を創造、提案し、心豊かな社会の発展に貢献します。

株式会社川島織物セルコン KAWASHIMA SELKON TEXTILES CO., LTD.は、京都市左京区静海市原町にある1843年(天保14年)創業、1938年5月(昭和13年)設立の会社である。

資本金100百万円、従業員数945名(2022年3月31日現在 連結)である。

事業概要は、

【インテリア・室内装飾織物】カーテン、カーペット、壁装、インテリア小物などの製造販売・室内装飾工事
【呉服・美術工芸織物】帯、緞帳、祭礼幕、和装小物などの製造販売、である。

役員は、代表取締役会長山口進氏、取締役副会長木村弘一氏(明治大学工学部卒)、代表取締役社長光岡朗氏、取締役常務執行役員肥後隆氏、監査役坪井祐司氏である。

同社には、川島織物文化館が併設されている。

同文化館は、織物文化に関する作品や資料約16万点を収蔵する、日本最古の企業博物館で、川島織物(当時)の当主であった初代川島甚兵衛と二代甚兵衛が世界中から収集した裂地(きれじ)や古書、当社が製作した、カーテンや壁紙、美術工芸織物などの原画や試織などを収蔵している。

川島織物文化館の歴史は、明治22(1889)年、京都の三条高倉に建てた3階建ての洋館「川島織物参考館」から始まり、明治19(1887)年にヨーロッパを訪れ、室内の装飾に織物が使われている事に感銘をうけた二代川島甚兵衛は、1階・2階で染織品や古書類を収蔵・公開し、3階は室内装飾織物を施した空間にし、室内装飾織物、今でいうインテリアファブリックの提案・展示をしていた。当時、日本ではファブリックを室内装飾に用いるという考えは無く、とても斬新な内装の建物であった。

その後、第二次世界大戦の戦火を逃れるため資料を移転させたため、休館を余儀なくされた期間が長く続きましたが、1984(昭和59)年に、京都市左京区市原に移転し、現在に至る。

(以上、同社HPより抜粋)

川島織物セルコンの前身は京都の名門インテリアメーカー「川島織物」と神戸のインテリア商社「セルコン」である。

旧・川島織物の創業は1843年(天保14年)で、1888年(明治21年)から室内装飾の分野に進出、明治、昭和の宮殿の内装を手掛けるなどした。皇室関係の品物を手掛けるとともに、インテリア部門ではカーテン、また繊維系床材、硬質系床材を手掛けている。

また、昔ながらの呉服や祭礼幕、和装の織機などを製造し、天皇の即位儀式関係、祇園祭に使われる祭礼幕は同社の手掛けたものである。産業資材では2010年までは、自動車向けのカーシート表皮材も手掛けていた。

また、セルコンの沿革となるが、1914(大正3)年神戸加納町2丁目にレース専門店「近藤忠商店」を出した。同商店は、室内装飾業界の胎動と始動期の業者23社の一つに入っている。

「近藤忠商店」の社長は、近藤忠吉(1890年誕生)であるが、近藤精一(1924誕生)が1950年近藤忠商店専務となり、その後、近藤忠商店社長を経て、1963年に近藤忠商事社長、1985年に近藤忠商事会長、1992年にセルコン会長となった。

2006年4月1日、川島織物は神戸のインテリア企画製品会社「セルコン」と合併し、「川島織物セルコン」となった。両社はカーテンに強みを持っていたが、「ものづくりは川島織物、マーチャンダイジングはセルコンが強く」、合併により、その強みを増したのである。

また、自動車などのシート表皮材事業は2010年7月にトヨタ紡織・豊田通商グループとの合弁会社TBカワシマ株式会社へ継承した。

2011年8月1日、LIXIL等を傘下に持つ株式会社住生活グループ(現・LIXILグループ)の完全子会社となり、同社グループ入りしたが、2021年1月6日付で川島織物セルコンが実施したMBOにより、LIXILグループから独立した。

訪問当日は、人事総務部 CSR・安全衛生推進グループ 岡田智恵子様と内林燦仁様より、説明をして頂くとともに、事前の質問についても回答して頂いた。
その後、岡田様より、同社工場を案内して頂いた。



人事総務部 CSR・安全衛生推進グループ
岡田智恵子様 川島織物文化館(1)



川島織物文化館(2)



川島織物文化館(3) 人事総務部
CSR・安全衛生推進グループ 内林燦仁様



川島織物文化館(4)



川島織物文化館(5)



(集合写真) 川島織物文化館玄関

先日企業訪問をさせていただいた際、多くの高品質で美しい貴社の製品を拝見させて頂きました。古くから培われた貴社の技術力を今後どのように活かしていくべきか、その事業として「カーテン」に注目されていました。お客様の要望に合わせて、貴社の技術力を活用することで、ホテルなどで使われる高級カーテンから、各ご家庭で使ってもらうカーテンまで幅広い商品展開が可能である点とカーテン業界においてカーテンを専門とする絶対的な大手企業がまだ居ない点を考慮すると、今後より貴社がカーテン市場で力を持つのではないかと感じました。

本当にありがとうございました。

I. (参加学生)

このような形で各地の企業様を訪問させていただくのは、会津、北見に続いて三度目となりましたが、回数を重ねるにつれ、企業を見させていただく視点や質問の精度が成長しているように感じ、今回の訪問につきましてはかなり深く川島織物セルコン様の理解をすることができ、非常に有益な機会となりました。

三年生ということもあり就活について考え始めている中、広告業界や食品業界になんとか興味があるかな

と考えていたのですが、川島織物セルコン様への訪問を通じて、メーカー業界の、人々の生活に寄り添った製品や、伝統的で何年も受け継がれてゆくようなものづくりを通じて社会を支えるという面白さを知ることができました。

私自身、男子チアリーディングをやっている舞台などに立つ機会があるため、緞帳はなじみのあるものであったので親近感を持って制作過程を見学することができました。

また、皇族の方々が見学に来られるような、歴史的にも文化的にも貴重な企業の歴史や製品の資料などが展示されている川島織物文化館の見学はためになったのはもちろんのこと、そこに飾られていた断機の教えからは私たちも学ぶべきことがあるなど心に留めておこうと思いました。

お忙しいところ企業訪問のお時間を頂いたこと、改めて御礼申し上げます。

末筆ながら、今後の貴社のご繁栄とご発展をお祈りしております。

H. (参加学生)

(5) (株)美十 京都本社・工場

同社の代表取締役社長 CEO は、酒井宏彰氏、取締役副社長は長峯憲史氏、常務取締役は中村吉彦氏、常務取締役は西田博一氏、取締役は渋井哲彦氏、井狩伸一郎氏、山崎伊佐緒氏、小林健太郎氏である。

監査役は堀村不器雄氏である。資本金は5000万円、従業員数は社員292名パートタイマー287名(社員換算)である。

当日は、取締役 西田博一様、執行役員 京都工場長 安福周史様、人事部長 尾関雅也様、人事部 採用課 係長 坂元雅哉様、人事部採用課 谷野春香様による説明を受けた。また、事前の質問にも答えて頂いた。

その後、工場長の御案内で工場を見学した。また、ショップ等の案内もして頂いた。



本社入口 〒601-8446 京都市南区西九条高島町



執行役員 京都工場長 安福周史様による説明(1)



執行役員 京都工場長 安福周史様による説明(2)



人気商品 「京ぼうむ」



マイスター制度



後列左から 藤江、人事部長尾関雅也様、取締役西田博一様、右端人事部 採用課谷野春香様
人事部採用課係長坂元雅哉様にも御世話になりました。

御礼状

先日はお忙しいところを我々のためにお時間を頂戴し、ありがとうございました。

実際に貴社の工場を見学させていただき、貴社の京都銘菓生八つ橋「おたべ」や洋菓子「京ばあむ」などを
はじめとする様々な商品がどのような過程を経て完成するのかを細かに拝見することができて非常に貴重な体
験となりました。

質疑応答では我々が事前に送らせていただいた質問事項に関するものに加えて多くの意見、情報をお聞かせ
くださいました。貴社の企業理念、長年にわたって紡がれてきた経営の本質、グローバル化やコロナ禍をはじ
めとし、絶えず変化し続ける世情で生き残る術など、他にも多くのことを学ばせていただきました。これらす
べては、現在就職活動中の私にとって大変意義深いものとなりました。

また貴社の製品をいただいたことも合わせて感謝いたします。どれもとても美味しく、特に「京ばあむ」に
は私の「京都名物といえば八つ橋」という固定概念を見事打ち砕かれ、貴社の弛まぬ企業努力が垣間見えまし
た。

まずは御礼を申し上げたくお便りいたしました。貴社のご発展ますますのご活躍をお祈り申し上げます。
ありがとうございました。

T. (参加学生)

先日はご多忙のところ、貴重なお時間を割いていただき誠にありがとうございました。

「京都といえば」のあのお土産たちが、あのように入の手と機械を総動員して作られていることを知りまし
た。工場での大量生産という、機械がほぼ全工程を担っていることを想像してしまいがちなので、京ばあむ
がひとつひとつ社員の方によって焼かれているという事実は、衝撃でした。

お話いただいた内容を、ゼミ活動の学びに活かし、一層の成長を目指して精進してまいります。

貴社のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。また、この度は誠にありがとうございました。

O. (参加学生)

会社の説明に加え、工場においても丁寧な案内をしていただきありがとうございました。食品の工場をここまで詳しく間近で見させていただいたのは今回が初めての経験で、効率性を求めた機械化と品質へのこだわりからくる手作業のバランスが難しい中、こだわりを持って取り組まれている想いやその視点は大変勉強になりました。どの部分を機械化し、どの部分は手作業なのかを決める際に背景にある想いや、妥協しない姿勢が多くの商品を作り出し、多くの人に愛される商品をつくる貴社の根源になっているように感じました。

また、会社全体では、多くの食品製造を請け負っており、技術やノウハウを生かし、積極的に事業領域を広げていく姿勢にも学ぶべきものが多くあると感じました。事業拡大のために、貴社が持っている技術のどの部分を応用するのかということや、「挑戦することで、新しい技術やノウハウを得られる可能性がある」という点を考えると、挑戦する姿勢を持つことが重要だと感じました。

T. (参加学生)